



(株) SIDE ROPE

代表取締役

PICK UP

THE PERSON

栗林 毅典

KEY WORD

頂

— itadaki —



栗林社長が15歳の時に飛び込んだ鳶職人の世界。当時抱いていた鳶職人のイメージは、純粹に「格好良い」だったという。実際に働き始めると、仕事のハードさは想像を上回るものだった。夏は暑く冬は寒い環境で、常に危険と隣合わせの作業。それでも同世代に負けたくないという一心で、厳しい修業にも耐えた。ビルのような高所でも臆せず身軽に作業をする鳶職人たちの姿は凛々しく、人々の視線を奪うことから「現場の花形」と呼ばれるに相応しい。そんな誇りを胸に、社長は鳶職人としての頂点を目指して登っていく。

「現場の花形と呼ばれる鳶の世界で、誰からも認められる存在になりたい」

安全な工事に欠かせない確かな足場、早さと美しさを求められる鉄骨建方、日本の建設現場を支える誇り高き鳶職人

高所での作業を担い、各種建設現場の基盤を築き上げている『SIDE ROPE』。危険を伴う過酷な現場で、技能に長けた鳶職人たちが工事を滞りなく進行させるために安全・高品質な仕事を全うしている。2017年に法人化を果たし、さらに活躍の場を広げていこうとしている同社を斎藤洋介氏が訪問。栗林社長と松岡取締役工事にインタビューを行い、その志に触れた。

――まずは、栗林社長の歩みから伺います。

(栗) 出身は東京の国立市ですが、父がサラリーマンで転勤が多く、幼いころから神奈川県相模原や宮城の仙台、東京の国分寺、そして神奈川県茅ヶ崎に移り住んでいました。その後、15歳で鳶の仕事に就きました。求人広告を見ていて偶然目に留まったのが鳶職だったのですが、当時はまだ鳶がどんな仕事をするのかも知らなかったんです。ただ、鳶職人の作業服である「ニッカ」が格好良く見えます。最初はそんな憧れからスタートして、それからずっと、この道一筋です。

――まだ15歳という若さです、実際に働き始めると厳しさも感じたのでは？

(栗) そうですね。体力が必要な仕事で、指導も厳しかったので何度も辞めたいと思っていました。それでも、高校に行っている同級生には負けたくないという思いがあり、休むことなく仕事に打ち込みましたね。2つ目に入った会社では良い親方にも恵ま

れ、様々な現場経験を集積することができました。

――早くから社会経験を積まれた分、独立されたのも早かったのでしょうか。

(栗) 22歳で、5人ぐらいの若い職人を連れて個人事業として独立しました。最初は、ベテランの親方が多い中、引けを取らないようにと気負っていましたが、周囲の方々に支えられて順調に実績を積み重ねていくことができました。現在は、足場・鉄骨・PCをメインに手掛けています。昨年には、ようやく法人化も果たせました。

――法人化については、何かきっかけが？

(栗) 昔と違い、今は社会保険の義務化をはじめ、あらゆるものが厳しくなっています。職人たちの働きやすさはもちろん、法人のほうが信頼も大きく、仕事の幅も広がると考えました。また、建設業許可証の取得条件を満たせたことも、法人化に踏み切った大きな理由です。組織としての基盤も整い、より一層引き締めて励んでい

くということですね。

――現在は、何名でお仕事をされているのでしょうか。

(栗) 8名です。まだまだ人手が足りない状態なので、さらに人数を増やし、人材育成に注力していこうと思います。私たちの時代はとにかく厳しく育てられました。今は、今までは定着しませんが、今後は定着しなければいけない場面が、後でフォローすることも必要だと思っています。当社の場合、私が叱った後に松岡部長がフォローしてくれるので助かっています。

――お2人は、長いお付き合いでいらっしゃるのですか。

(栗) 私が独立してまもなく、当時のメンバーの紹介によって出会い、以来約8年一緒に頑張ってくれています。今は工事部長として皆の士気を高めてくれ、本当に頼りになる存在です。

(松) 社長は男気に溢れて厳しいところがある反面、ロマンチストな部分もあり優しい方です。たとえば誕生日だという人に、サプライズで花束をプレゼントすることもありました。何事にも熱い方なんです。――それは素敵ですね。心を込めて祝ってもらい、相手も喜ばれたことでしょうか。

(栗) 私の親も、私がつどものころから誕生日などの祝いを大切にしてくれていたんで、自分も記念日を大切にしたいと思っています。ただ物をプレゼントするのではなく、サプライズすることによって相手が喜んでくれる姿を想像してしまう、いやらしい自分もいます(笑)。ただ、人の笑顔によって、自分も幸せをもらえますからね。

――人情に厚い社長の人柄が窺えますね。メリハリがある職場環境も、良い仕事につながっているのでしょうか。

(栗) この仕事は屋外で高所の作業なので、安全管理などにも細心の注意が必要となり、気を抜けません。その分、足場鉄骨を組み上げた時の達成感は大きいです。他の業種の方で、会社帰りにジムに寄って身体を鍛える人も多々ありますが、鳶の場合は仕事自体が体力勝負。仕事をしながら自然と身体も鍛えられ、一石二鳥ですね。

――この仕事を心から好きでいらっしゃる様子が伝わってきます。最後に、今後の展望をお聞かせ下さい。

(栗) この業界に入った当時、「いつかは鳶職で関東トップの座に就く」と豪語していました。仕事を続けるに従ってその厳しさも知りましたが、今でも気持ちだけは誰にも負けません。今後は県内屈指の会社となることを目指し、「鳶といえば『SIDE ROPE!』』と言われるようにしたいですね。そのためにも今以上に技術の向上に努め、会社を発展させていきたいと思っています。



斎藤 洋介 (俳優)

「若くして鳶職人の世界に飛び込んだという栗林社長。最初は格好良さに憧れてこの仕事に就いたそうですが、厳しい修業にもめげることなく、長年この道一筋で腕を磨いてこられたそうです。お話からは、このお仕事に対する強い誇りが感じられました。そうして現在は、自らが若い職人たちの憧れの存在となっていることでしょうか。今後も多くの若い人材を育むために、このお仕事の魅力を伝え続けていただきたいですね」



取締役工事に部長
松岡 直彦



代表取締役
栗林 毅典



VIEW POINT

鳶業界の中で横網的存在に

▼建設現場にいち早く入り、足がすくむような高さを物ともせず足場や鉄骨を組み上げる鳶職人たち。その鮮やかな仕事ぶりから「現場の花形」と称され、江戸時代には祭や火消しの場を仕切るのも鳶職人だったというほど、昔から一目を置かれる存在であった。今もなお、各種現場を支える彼らは多くの職人から頼りにされており、その勇姿に憧れる人は多い。安全で効率良く工事を進めるために、鳶職人たちは各現場で活躍している。

▼そんな鳶のプロ集団として、高い技能を遺憾なく発揮

している『SIDE ROPE』。その社名にも、熱い思いが込められていた。SIDE = 横、ROPE = 網という意味の単語を組み合わせ、「横網」という意味を持たせた同社の社名。横網と言えば、言うまでもなく相撲の花形である。横網は英語で「Sumo grand champion」と呼ばれるが、『SIDE ROPE』とすることで、作業用のロープにちなんだ社名のようにも取れ、鳶職人らしい。「現場の花形」とされるこの業界で、横網のような存在になれるように――そんな意気込みが、社名には隠されている。

Company Profile



株式会社 SIDE ROPE

神奈川県大和市中央 7-1-3
URL : <https://side-rope.co.jp/>